

文化庁

46. 1

〈月報〉

昭和46年1月15日 発行

編集
発行 文化庁長官官房庶務課
東京都千代田区霞が関3-2-2
電話代表 (581) 4211
郵便番号 100

—〈第29号〉—

(題字=今日出海 文化庁長官)



埴輪猪 (東京国立博物館蔵)

もくじ

- ▽「色々と思うこと」
今日出海……………2
- ▽芸術祭大賞・優秀賞決まる……………3
- ▽新著作権法施行……………4
- ▽写真の著作権……………6
- ▽財団法人海外子女教育振興財団
の設立について……………7
- ▽昭和四十六年度A F S奨学生
第三次選考試験終わる……………8
- ▽随想「なみだがたり」……………8
- ▽文化財補助金(第四回)決まる……………9
- ▽史跡等の新指定……………10
- ▽文化財白書シリーズ(2)……………12
- ▽博物館の旅を終えて……………13
- ▽国立博物館・美術館日より
東京国際版画ビエンナーレ展……………14
- ▽地方だより
富山県……………14
長野県……………15
- ▽「日本の宗教」(英文版)の刊行
について……………16
- ▽国立劇場二月公演……………16
- ▽文化庁日誌・人事異動……………16

昨年暮れの三十日まで予算で庁内は忙殺され、夜具蒲団が持ち込まれ、泊り込みの予算風景が展開されていた。誰かが風呂へ入りたいなアと眩くのを耳にした。

ところが正月四日御用始めの日には誰も彼も晴れやかな顔をして登庁し、新年の挨拶を交わしている。私は予算をとるのもむずかしいが、これを有効に使うのもむずかしいと年頭の挨拶で述べた。

私は昨年の十一月にボストンへ禅林美術展を開くべく渡米したが、甚だ外人には難解と思われる禅画を集めて、果たして人が集るだろうか、特殊な好事家か学者だけが見に来るのではあるまいかと思っていたら、非常なというより、むしろ異常なほどの入場者で、予期しない大成功をおさめた。ライシャワー氏であったか、日本人の考えで、禅林美術の一級品と認められるものを並べたことがよかったですと言っていた。これは外人にはわかるまいとか、或いはこれは米人向きであるとか、余計な顧慮付度をせずに、いいものは誰にもいいのだという確信が、この美術展が成功した所以だという意味らしい。

文化の強味はそこにあるので、政治や外交の複雑さや困難さは文化の原則が通用せぬところにあるのだから。では文化の世界は単純卒直かという必ずしもそうとは言えない。人間世界である以上、原則は単純でも扱うのも人間なら、

鑑賞し、評価するのも人間だから、ややこしくなることがある。

私は元来批評は信用しても、批評家の言葉をそれほど素直に信用していない。批評家は特別製の眼を持っていてるわけでもあるまいし、鑑賞者は盲目でもなし、弱者でもない。美術なら美術作品を沢山見ているだろうし、それに知識を持っている。それだけが強味である。従ってもっと謙虚に無心に美術品に接し、これを鑑賞すべきであると思っている。ものを理解するためには謙虚な態度と

色々と思ふこと



気持が大切だ。偏見なくして人やものに接することは容易なようで、なかなかむずかしい。知識人は知識の故に偏見をより多く持つ傾向が強い。人には思わぬ陥穽があるものだ。

私はしち面倒な表現で、もって回った批評文を読むと胸が悪くなる。達人の批評文はいくらむずかしくても、努力して読めば解るものだが、ただ文章だけが難解そうに見えて、その実体は浅薄で、偏見に満ちていては読むだけの努力が勿体ない。

私のように眼が悪く、年をとっては読むことはなかなかの大事で、それだけに何らかの啓示を受けるものでなければ、読む努力は無駄に等しい。それでも読みたい書物が机上に山積している始末である。困ったことである。

昨年は藤原飛鳥に始まり、それに終わったといつていいほど飛鳥問題は世間の口の端にもものぼり、われわれも忙殺された。が、結論としていえば、それほど複雑でも、雑解でもなく、至極簡単な事柄である。要するに飛鳥を今の姿のまま、これ

以上余り変改を加えずに後世へ残したい、それだけのことである。

しかし、この簡単なことが簡単に運ばぬところに現代のむずかしさがあるともいふべきだろう。日本が当面するさまざまな難問題も、詮じつめれば簡単な事柄に違いない。しかし解決しようとすればするほど、もつれて容易に解けそうもなくなってしまうようなものである。

藤原宮趾、しかもその中心である大極殿の跡に小学校が建っている。これをどこかへ移転して、大極殿の跡を整備しよ

うとしても、どこへ学校を移すかとなる、ああでもない、こうでもないとい異論続出して、いまだに結着を見ない。これはむずかしい問題だということになってしまふ。話し合いというものがつかぬのである。先日読んだユダヤ人のペンダサンという人の「日本人とユダヤ人」という本によると、日本人は対話のない国民だといっている。半分話すともう話したいこと、何故話したいか、話す気持、皆んな裏の裏までわかっってしまう。つまり言外の意は立ちどころに汲みとられるのだ。日本人同士だと話の裏のヒダまで忽ち見抜いて、表の話は簡単に片附くから、討論もなければ、対話らしい対話もない。これで済んでいけば世話はないが段々自分の主張、自分の利益だけを言い張って、相手のいうことを聞かなくなると、ことは面倒になる。対話の習慣がないから一層複雑になる道理である。

大和国ばらを後代に残そうと単純に考えても、残す手段は容易ではない。へたに手を加えようと逆に今の姿さえ失われる恐れさえ出てくる。何も壊そうと思つて手を加えるのではないだけに余計厄介だ。今の姿というイメージは人によって異なるものだ。日本語の不正確さ、曖昧さそして微妙さ、こんなことまで考えさせられる。誰も彼も勤勉で、一生懸命だから、なお更むずかしい。説得力には言葉以外の要素が入りすぎると、時にユダヤの律法精神が羨ましくなる始末である。